

北朝鮮人道支援の会 ニュースレター NO.47

(朝鮮民主主義人民共和国)

編集・発行人 吉田 康彦

〒330-0855 さいたま市大宮区上小町1 1 4 5 TEL:048-641-8203 FAX:048-647-6191

E-mail: yy2448@chive.ocn.ne.jp URL:http://www3.ocn.ne.jp/~yy-dprk/

2007年5月1日

郵便振替番号: 00140-4-126579 加入者名「北朝鮮人道支援の会」

日本語図書・教材支援 訪朝団の成果みものる

——平壤外国語大学日本語科に 150 冊寄贈

米田伸次氏(国際理解教育学会会長)の発案で、2年前の前回訪朝の際に約束した日本語図書と教材の支援が実現した。

日本政府が経済制裁を強化・延長し、「日本国民は北朝鮮への渡航を自粛せよ」と出国ゲートに注意書きが掲げられている関西空港を、私たち8名の訪朝団は4月4日午前10時、瀋陽に向けて出発した。出国時の手荷物審査は厳重をきわめ、渡航の目的、滞在日程などをこまめに尋問された。全員のスーツケースには150冊の書籍がビッシリと詰まっていた。

同日夕刻、平壤の順安空港着。顔なじみの対文協(対外文化連絡協会)の孫哲秀副局長以下4人の日本担当職員が出迎えてくれてこちらの方はフリーパス。一行は高麗ホテルに投宿。11日まで一週間滞在。団長の私は8回目の訪朝。構成は下記のとおり。

団長 吉田 康彦(本会代表)
共同団長 米田 伸次(帝塚山学院大学国際理解研究所特別顧問)
書記 中戸 裕夫(立命館大学准教授)
亘 佐和子(毎日放送「MBS」記者・ディレクター)
佐野 弘三(アジアポランティアセンター理事)
荒井 静(東京国際大学4年生)
深津 冬性(東京国際大学2年生)
道正 健(東京国際大学2年生)

<当初参加予定だった田沼、波佐場両氏は都合で不参加>

滞在中のハイライトは、いうまでもなく平壤外国語大学日本語科に150冊の図書を寄贈し、日本語科の学生有志と短時間ながら交流、意見交換したことだ。(詳細は裏面の荒井静さんの報告を参照されたい。) 米田共同団長は今後も教材支援継続を約束、とくに視聴覚教材の提供を求められた。

日本語科は最近の日朝関係を反映して志望者激減。1999年から2007年までは、英語、中国語、ロシア語に次ぐ人気で、「学部」に昇格したものの、今年度から再び「学科」に格下げされてしまったのが実情。今回の図書支援が多少の刺激となって日本語学習人気の回復につながることを期待したい。

もうひとつのハイライトは、南北を分断する非武装地帯近くの開城工業団地訪問。北から日本人代表団が訪問し、工場を視察するのは初めてのこと。南の資本と技術、北の土地と労働力を結集した南北協力のシンボル、将来は2000万坪の敷地に3000社の企業が進出して、北の労働者10万人を雇用する計画という。計画を統括している現代グループの責任者は「開城は朝鮮半島の中心。地の利を生かして北東アジアのシリコンバレーにしたい」と抱負を語っていた。

<個別の報告は『ポリシーフォーラム』NO.34(5月1日号)を参照>

「北京2・13合意」は期限 がずれても進展する!

——実現に向かう「朝鮮半島非核化」

米朝・日朝国交正常化、テロ支援国家認定解除、朝鮮半島非核化、恒久平和の確立めざした「北京合意」は、北朝鮮が前提としてきた金融制裁解除がもたつき、冒頭からつまづいているが、大勢がくつがえることはなく、着実に進展すると思われる。

その理由は、泥沼のイラク情勢と深刻なイラン核開発に直面しているプッシュ米政権にとって、北東アジア情勢の緊迫化は絶対に避けたいところで、次のような思わくが強く働いている。

第一に、歴代米政権にとって核不拡散は最大の政策目標であり、北朝鮮をこれ以上放置すると核実験をくりかえし、核弾頭の高性能化と大量生産を阻止できなくなり、その分だけ朝鮮半島非核化は困難になること。核が第三者に渡る可能性もある。

第二に、このままだとプッシュ大統領の2期在任中の成果が何も無いことになり、引退の花道を飾れなくなること。

以上の理由から、「合意」の逆戻りはありえないのだ。プッシュ大統領の在任期間はあと1年8カ月。次期大統領選挙までは1年半。この残り任期が駆け引きの正念場となる。

履行時期はずれ込んでいるが、「合意」の初期段階すなわち、寧辺の黒鉛減速炉とプルトニウム再処理施設の稼働停止とIAEA(国際原子力機関)による封印は実施に移されるだろう。

難関は、北朝鮮側の核開発計画の提出、既存の核関連施設の申告と「無能力化」で、この段階で「北」が軽水炉の提供を持ち出してくるのは間違いない。

「北京合意」の基礎となっている2005年9月19日の6者協議の「共同声明」では、「適当な時期に協議する」ことで合意しており、その際に合意されている「同時行動の原則」からすれば当然である。しかも5カ国側は北朝鮮の「原子力平和利用の権利」を認めており、平和利用施設の廃棄までは求めていないのだ。

この点に関連して、日本の自称「専門家」たちの多くは「金正日総書記は絶対に核を手放さない」と断言しているが、核というのは手放せば二度と造れないという代物ではない。必要なら、また造れるのだ。

「秘密のウラン濃縮施設と既存の核弾頭を隠匿し続けるに違いない」という疑惑も根強いが、たとえそうでも、それらが無用の長物になる状況を作り上げ、体制存続を保証するとともに経済協力でこれを裏づけることが先決である。その点で韓国政府の対「北」融和路線は正しい。

忘れてならないことは、金正日総書記にせよ誰にせよ、核兵器など必要としない安全保障システムを朝鮮半島に構築するということだ。それこそが朝鮮半島非核化であるはずだ。

<吉田 康彦>

日本語図書・教材支援訪朝団に参加して

荒井 静(東京国際大学4年生)

今回は、日本語教材支援訪朝団の一員として朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)を訪問した。「悪の枢軸」「独裁国家・北朝鮮」「拉致」・・・日本で北朝鮮バッシングが横行し、「北」に対する激しい嫌悪感が渦巻く中で、私たち東京国際大学下羽ゼミでは、2002年から朝鮮大学校の学生たちと交流をしてきた。

在日朝鮮人の学生との交流は、単純な政権批判や拉致問題一辺倒に固執する姿勢を脱し、「北」を理解しようとする姿勢が日朝関係を考えていく上で最も重要なことであることを教えてくれた。今回の訪朝は、彼らが語る「共和国」を超えて、自分の目でかの国を見つめる絶好の機会となった。

路面を走るバス・電車、足早に駅に向かう人びと、立ち並ぶビル。北朝鮮を訪れて初めに驚いたことは、活気に満ちた平壤市街の様子だった。腐敗した体制の中で人民が苦しめられているという一面的な「北朝鮮」報道しかされないなかで、そうしたイメージを覆すような発展の光景が私たちの目に飛び込んできた。朝鮮戦争で壊滅的な被害を受け、厳しい制裁と圧力を受けながらも主体思想に基づく国家建設を実現しようという強い気概が感じられた。私たちが自由に歩き、人民と接触することはできないが、

今回は平壤外国語大学日本語学科の学生に日本語教材を寄贈するという目的と共に学生間交流が実現した。張りつめていた議論の雰囲気は、在日朝鮮人との交流の記録を収めたビデオを上映したことから段々とほぐれていった。「共和国」の学生は、

日本で在日朝鮮人が被っている中傷や圧力に断固として反対する見解を示し、私たちが在日朝鮮人の立場を理解するよう迫った。

一方、私たちは在日朝鮮人との交流を進めるなかで、「共和国」理解も深めていきたいという希望を述べ、日本国内の日本人が日帝の植民地支配を彷彿させるような人間ばかりではないことを認識してほしいと訴えた。議論は短かい時間ではあったが、双方の学生が歩み寄り、日朝友好を促進する努力をしていくことを確かめ合うことができた。この他にも、南北合弁の開城工業団地や中朝合弁の大安親善ガラス工場などに訪れ、日朝関係が停滞する中で、韓国・中国との関係が深まりつつある現場を目の当たりにした。

北朝鮮は、日本で広く信じられているほど脆弱でもない、孤立しているわけでもない。経済制裁を6ヵ月延長した日本政府の対応は、「共和国」で日本語を学んで日朝間の橋渡しをしようとしている学生たちの夢や希望を打ち砕いているのだということを強く認識した。二国間関係を促進できるような対話のチャンネルを活用して、拉致問題ははじめ懸案を解決しようとする日本政府側の政策転換が何よりも必要であると確認した旅だった。お世話



平壤外大日本語科学生と(中央が筆者)

になった関係者の皆さんに感謝したい。(本会会員)

通信欄

会費・義援金・寄付金ありがとうございます。

以下はニューズレター前号(2007年3月1日付)刊行以来、会費・義援金を納入して下さいの方々。(納入日付順・カッコ内は金額)

【年会費・義援金】

今泉英明(5000円)、増岡信男(4000円)、深津冬惟(3000円)、朴 智子(5000円)、波佐場清(4000円)、北羅修一(5000円)、北羅貞子(10000円)、大原美香(5000円)、阿部新(2000円)、伊藤成彦(3000円)、坂石裕司(4000円) 北川広和(2000円)、清水義和(11000円)、姜 富三(4000円)、酒井紀子(5000円)、道正 健(3000円)、徳田幸博(2000円)、横山 新(5000円)、匿名希望(5000円)、手束光子(6000円)、佐渡友 哲(5000円)、佐野弘三(5000円)、嵐 悟(4000円)、児玉秀智(5000円)、沼田昭介(3000円)、小林将人(2000円)、工藤朋子(図書券1500円)、前田康博(5000円)、櫻井善作(3000円)、亘佐和子(10000円) 匿名希望(5000円)、鶴丸玲子(3000円)、坂下康子(6000円)、松元 洋(10000円)

累計人道支援基金・運用資金 318,349 円

(2007年4月末日現在/訪朝関連費用は未集計)

次回、人道支援実施のための目標は100万円です。ご協力をお願いします。基金が一時的に減少するのは、ニューズレターの印刷、発送費用等の支払いが生じるためです。

なお年会費2000円は「ニューズレター」の購読料金で、会員としての最低限の抛出額です。年間の編集・印刷費用、郵送料、事務経費で、ほぼ相殺されます。2000円に上乗せして送金して下さいの額が人道支援の基金となります。金額は自由ですが、なるべく多額のご寄付をお願いします。寄付は常時受け付けています。

会員からの近況報告:

*宮城県日朝友好親善協会新年会で、本年9月に代表団派遣を提案し、全会一致の賛成を得ました。(仙台市・今泉 英明)

*94歳になりました。北朝鮮バッシングに明け暮れるマスコミ報道に心を痛めています。日朝国交正常化の一日も早い実現を祈念しています。(さいたま市在住・横山 新)

*日本から共和国の子どもたちに少しでも多くのサラン(愛)が届くよう祈っています。(横浜市在住・鶴丸玲子)

*人道支援を通じた温かい交流が日朝両国の雪解けにつながることを祈念しています。(東京都在住・嵐 悟)

*日朝関係も、中国との交流進展で、少しは明るい兆しも見えてきたような気がしています。(宮城県議会議員・坂下康子)

最新刊:『どうするプルトニウム』のご案内

館野 淳・野口邦和・吉田康彦編著

リベルタ出版(定価2000円+税)

プルトニウムという元素の特徴/日本におけるプルトニウム利用計画の理想と現実/北朝鮮の核開発の真相などを専門家がわかりやすく解説。本会会員は20%引。